



ふだんの茶目っ気たっぷりの表情とは異なり、仕事中はかなりまじめな中村さん。染めたあとも、2~3分乾かして水洗い、その後脱水機にかけて自然乾燥、と作業は続く



「新しい色を染める時にはドキドキする」と話す中村さん。それらを記録した染色ノートは、現在No.40を数える

中村工房



したものは全然売れない」と苦笑するが、見せていただいたストールは春や夏にも羽織れそうな爽やかな配色のもの。大胆な柄も大きな特徴で、中村さんのユニークなセンスがうかがわれる。

ユニークなのはマフラー・ストールだけではない。同工房には、東京在住の帽子作家や革工芸品作家とのコラボレーションから生まれたお洒落な帽子やバッグもいっぱい。工房のシヨールームでその可愛らしさにすっかり魅了されつつ、ふと疑問がわいてきた。長い歴史を誇る中村工房で、なぜこんなにお洒落で可愛らしい作品が生まれるのだろうか?

さらにマフラー・ストールをよく見ると、「中村工房」のタグと、中村さんの名前「博行」の頭文字「ひ」を記したタグの2種類が縫い分けられている。うーん、なぜ?

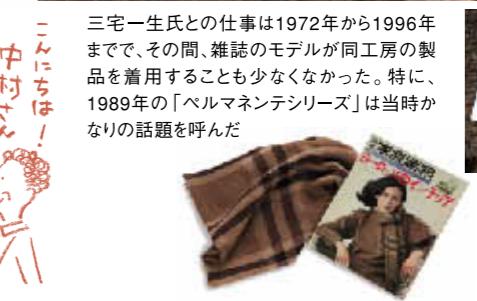
を卒業して工房に入った中村さんがその役を引き継ぐ。そして一生氏と一緒に仕事をしていく中で、和服のショールを作ったり、機械紡ぎの「紡毛糸」でストールを作るなど、本来の木一ムスパンと質感や風合いが異なる小物を製品化。同時に中村さんは「今のかの色」を作り出すため、化学染料も多くの色を使うようになった。

こうして旬のエッセンスを取り入れた小物は、東京や大阪で行う展示会で人気を博した。そこで1980年代の半ば頃、思い切ってマフラー・ストールなどの小物を専門に作りはじめたというわけだ。

「織り」を担当しているのは、中村さんの奥様・都子さんとお姉さんの裕子さんを含め5人。製品の作風を左右する「糸紡ぎ」は、以前盛岡に住んでいた今は横浜に住む加藤裕子さんに頼んでいる。

デザインも担当している都子さんは、「デザインは染め上がった糸を見て考えることが多いんです。その点で主人は流行の色で染めたり、糸もカシミヤや紡毛糸、梳毛糸などを使うので糸のバリエーションが豊富で助かります」とやんわりと褒める。

下は一生氏が来盛した際の記念写真。右は、太田垣晴子氏のイラストが楽しい、一生氏の誕生パーティー(世話人は石岡瑛子氏ら)のFAX招待状。「一生さんと会えたおかげで、業界の第一線で活躍する『刺激的な人たち』と出会うことができた」と中村さん



実際、中村さんは「今の色」にこだわる。「今の色が欲しいから、女性向けのファッション誌を買ってチェックしている」「いくら伝統技術があつても『今』がないとダメだと思う」と何度も「今」という言葉を口にする姿には、時には「こだわり」以上の強い信念さえ感じられる。

現在使用する染料の8割は化学染料だが、天然染料でも現代人好みの色を出すための工夫は欠かさない。例えば、先代は乾燥させた植物を使つてのに対し、中村さんは「色がよく出るから」とフレッシュの草木を使う。また一般的にはそれらの素材を3回まで煮出して使うが、中村さんは一回きり。もちろんコストは高くなる。「でも、色は濃い方がいいでしょ?」とこだわり。

染め上げた糸は、先代から引き継いだ「染色ノート」に記録される。約30年前に引き継いだノートはNo.10だったが、現在はNo.40。1ページの記録数に多少の違いはあるかもしれないが、それでも中村さんは代替わりして圧倒的に色のバリエーションが増えたのは明らかだ。

さらに中村さんは、時々デザインも手がけるという。「でも、俺がデザインは明らかだ。

